

田原博人氏ロングインタビュー

第1回：少年時代～高校時代

高橋慶太郎

〈熊本大学大学院先端科学研究部 〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪 2-39-1〉

e-mail: keitaro@kumamoto-u.ac.jp

インタビュー協力：千葉庫三（東京科学大学／国立天文台）



今月より、田原博人氏のインタビューを連載いたします。田原氏は立教大学で物理学を学び、電波源の直線偏波カタログをまとめてそのファラデー回転から銀河磁場に迫るなど、宇宙磁場研究の草分けとして知られます。また田原氏は野辺山宇宙電波観測所の運営・共同利用の仕組みづくりに携わり、2001年から2002年に日本天文学会理事長を務めるなど、天文学コミュニティに大きく寄与しました。宇都宮大学では教育学部長・学長を歴任し、教育学や大学の在り方に関する議論でも大きな貢献をしました。第1回は少年時代から高校時代まで、店の品物を教材にした実験、戦中戦後の村の記憶、卒業文集をめぐる思わぬ手紙、高校自治会などの話を伺いました。後に天文学コミュニティや共同利用体制を作っていく田原氏のリーダーシップの萌芽がすでに見られます。

田原博人氏略歴

1936 島根県生まれ

1962 立教大学理学部物理学科 卒業

1968 立教大学大学院理学研究科博士課程 修了

1970 東京大学東京天文台 助手

1974 宇都宮大学教育学部 助教授

1980 宇都宮大学教育学部 教授

1995 宇都宮大学教育学部 学部長（～1999）

2001 日本天文学会 理事長（～2002）

宇都宮大学 学長（～2005）

2012 瑞宝中綬章 受章

2025 88歳で死去



田原博人氏

●はじめに

田原さんへのインタビューは2022年12月に始まりました。その後2025年5月まで、合計9回にわたってお話を伺いました。インタビュー開始時にはすでに86歳というご高齢でしたが、1回に

3～4時間も力強く語り続けられ、その記憶の確かさと熱量には、こちらが圧倒されるほどでした。最終回は入院中のベッドの上でしたが、変わらぬ力強い語り口で想いを伝えていただきました。そのインタビューの2週間後、田原さんは逝

去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

●村の雑貨店

高橋: インタビューをお引き受けいただきありがとうございます。田原さんのお生まれは1936年(昭和11年)、島根県ということですね。

田原: 今は島根県益田市ですね。当時は美濃郡種村という。

高橋: どういうところなんですか？

田原: 益田っていう町から十数キロ西の方の村で、当時人口は1,500人くらいかな。今は数百人しかいない過疎地になってますけど。まあそんなところで生まれて、家は商売、雑貨屋をやった。ほかにも田舎なりに小さな店はあったんですけど、うちが一番大きな雑貨店で、日用品、衣類はあるし、薬品も売ってるし食料品、文房具、とにかく村の生活に必要なものはすべて僕の家でまかなわれてるというような感じの店だったです。

高橋: 周りは農村ですか？

田原: 周りは農村。うちはその中心的な店で、多くの人が生活するために僕の家買い物に来てたんです。もう朝みんな早いですからね、朝の6時から暮れまでずっと店は開けっぱなしで。たぶんね、年間店を休んだ記憶はないですよ。正月もやりましたしね、暮れはかき入れ時ですから。

高橋: ご両親がお店をされてたんですか？ もっと上からですか？

田原: ええ。いや私から見ておじいさんの話はあまり聞いてないんですよ。なにか父親の方の親は結構流れ者的っていうか、父親自身も教養があるわけではないというか、要するに子供の時の成績的な言い方をすると、あまり出来がよくなかった。ですけれどもまあ日常的にいろいろと鍛えられているものですから、僕はそれなりに父親からいろいろなことを教わった気がします。母方のおじいさんはわりに地域では著名というか、明治時代

の学校の先生をやったような人だったものですから、僕は小さい時からいろいろなプレゼントをもらったくらいです。だからおじいさんから母親の子供の時のことはよく聞いてて、すごくできていたって(笑)。だから本当は田舎に隠れていないでいれば、かなり解放された女性になれたのかもしれないけど、結婚してそこに住んでいるということ。

高橋: お店をやってるってことは結構裕福な家庭ということですか？

田原: ああ、村から見たら裕福だと思います。あのう母親も父親も勉強をしろというようなことは一切言わない親だったんですよ。父親はほとんど勉強というのに興味がない男ですから、何かちょっと遅くまで勉強をやっていると、「電気代がもったいないから消せ」と言われて育ったんです。母親はまあよくできたんですけどあまり勉強のことは言わない。

高橋: どのくらいの頃からご記憶がありますか？

田原: 1歳の時の記憶がある。あるんですよ。なぜ1歳の時の記憶があるかといったら、私の姉が4歳で亡くなったんです。なんで亡くなったのか原因はわからないんですけど、ケイコという姉で、断片的に記憶にあるのはね、姉と一緒に小学校に行って、小学校で飼ってるヤギとかそういうのを見に行った。行くときに姉は母親に抱かれて行って、僕はよちよち歩いて行った。要するにもう姉は歩ける状態ではなかったということだと思います。

それで姉が亡くなる直前だと思うんですけど、あまり食べられなくなって、何が食べたいのかって母が聞いたら、「お菓子が食べたい」と言うんですが、うちのお店にはお菓子は売ってなかったものですから、父親が十何キロ離れたところに買いに行ったらいいんですよ。それで食べさせようとしたら、「食べられない」って。僕は博人というんですが、みんなはひろちゃんひろちゃんと言っててね、姉が「これ、私食べられないからひ

ろちゃんに食べさせて」って。その思い出は僕にはないんですよ。あとで母親から聞いた思い出です。その話を聞くとね、妙に目がうるうるするような思い出。それがなぜ1歳というのがわかったかという、お墓なんかを見るとね、何年何月何日、姉が何歳の時に没というのが墓石に書いてあるんだよね。それを改めて見てみたら、僕が生まれて1年半くらいで死んだことになってるんですね。

高橋: そうなんですネ。

田原: 私は昭和でいえば11年生まれですけど、昭和16年に戦争に入りまして、あんまり直接は聞いてないんだけど、父親は戦争に行くのが嫌だったみたいなんです。そうすると例えば炭鉱で働くとかね、そういう道もあったらしいんですよ。だから徴兵されるのが嫌だからというので僕が小学校行く前に父親が一人で北九州の炭鉱堀に行ったんですね。

高橋: 炭鉱に行けば兵隊に行かなくていいと。

田原: 兵隊にならなくて済むと。ただ炭鉱に行くと、しばらくして病気になったんですね。その時は弟が生まれていたので母親が弟を連れて北九州に看病に行って。それで僕が5歳ころかな、家に1人取り残されるってことになった。だけど5歳の子が1人で生活はできないから、親せきのおばさんとかいどこが来てしばらく一緒に生活をして。それで父親の病気が治って、退院してもいいということで北九州から帰ってくるんですね。僕が覚えているのは、父親が帰ってくるのを川で魚釣りをしながら川から眺めていた。人力車みたいながありますよね、それに乗ってお父さんが帰ってきたというのは妙に記憶がある。

その当時戦時中で、油が不足していたんですね。それで、どこまで利用したのかわからないけど、松根油というね、松の木を蒸して油を取るということをしてたんです。要するにもともと大東亜戦争を始めた理由はアメリカから石油の輸入をストップされたからで、油が不足した時期なんですよ。

でも油がないと戦争にはならないですよ、ね、飛行機を飛ばすにも。日本では石油はそんな生産できないからというので、松の根を蒸して油を取り出すということをやって、父親もその工場、工場というほどでもないですが、しばらくやってみました。

高橋: 工場を立ち上げたってことですか。

田原: そうそう。たぶんうちだけじゃなくて日本全国いろんなところでやってたんじゃないかと思っていますね。で、時々兵隊さんが手伝いに来ました。松の木を割ったりとかね。それを蒸すのになんか大きなタンク、子供のイメージ的にはね、高さが3mで直径が1 m50 cmくらいのタンクがこう3つくらい置いてあって、そこに松の根とか木を入れて、蒸して出てくる油を集めてドラム缶に入れて。そのあとどういうふうになるかっていうのは知らなかったですけど、私もよく手伝いに行って、へえ面白いなあと思いながらやってみました。

●戦争の記憶

高橋: たぶん戦争が何かっていうのも当時はそんなにわからないですよ。

田原: はい、でも戦争の経験というのは田舎でもそれなりにあるんですよ。空襲はないけど空襲警報はあるんです。覚えているのは探照灯っていうのかな、サーチライトみたいなのがあってね、それで夜はよく空をこうチラチラチラチラやってるんですよ。要するに飛行機が飛んでるのを見つけるためなんでしょうね。それで見つかったかどうかは別として、やってました。それから夜は消灯するか、カバーして外に光が漏れないようにする。だから戦争中という認識はありました。

高橋: 実際に空襲は来なかったんですか？

田原: いや空襲は一切ないです。警報があって飛行機が空高く飛んでるなど、あああれがB29だというふうに言っていた記憶はあります。

高橋: 見たんですか？ でも爆弾が落ちてくる

ことはなかったわけですね。

田原: ない。でもビラが落ちてきたことはあるんですね。拾った記憶があるんです。

高橋: 何を書いてあるんですか？

田原: 覚えてない。そのころビラを拾ったらすぐどっかに持って来いっていうようなことでね、中身を読んだ記憶は……。

高橋: まだ小学校低学年ですもんね。

田原: ええ。まあ空襲が起こるのは終戦直前でしょうから小学校2年か3年ごろだと思いますね。それから小学校では私たちもそれなりの訓練はしました。手榴弾というのを遠くに投げる訓練。竹やりの訓練もあるんですよ。僕の家から学校までというのは百数m、すぐそばなんです。その中間のちょっと高いところにお宮があって、その広場に藁人形が3体くらいあってね、「鬼畜米英」とか何かぶら下げて。朝、学校に行くときにお宮に回り道をして、藁人形を竹やりでエイヤーって何回か突いてね。

千葉: それは誰かにそうしなさいって言われて？

田原: たぶんそうしなさいと言って大人が藁人形を作ったんでしょうね。それに何か意味があったのかどうか知らないけど、とにかく言われたのでやって。それから4,5 km先に300 mくらいの、その近辺では一番高い山があって、そこからは日本海が見えるものですから、そこに大砲を置いてね、日本海側から攻めてきたらそれを撃つんだという話はなんとなしに聞いた記憶があるけど、実際はやらなかった。やるような場所は作ってはいたんですね。終戦後、その山に遠足で行ったときに、「ここは大砲を置くために平らにしたんだよ」とかなんとか聞いてましたよ。

高橋: 竹やりの訓練をして、手榴弾の練習もして、なんかあったら自分もっていう意識もあったんですね。

田原: ええ。あと小学校の奉安殿というところに天皇陛下の写真があってね、朝は礼をするとかね。

高橋: 教育勅語を読んだりとか？

田原: 教育勅語も読まされました。だけどまあ後々にも関係するんだけど、僕はどういうわけか記憶をするというのが苦手だね、結局覚えなかったね。結構覚えた子もいたのに。いや僕はね、考えるのはすごく好きでね、だから特に理科と算数は断トツに成績がよかったんですよ。だけどね、国語とか社会とかそういう記憶するものは断トツではなかった。だけどまあ田舎でクラスにせいぜい36人か37人くらい、1学年1クラスの学校ですから、そのトップだって知れてますよ。

●級長の責任

田原: その当時、学校が決める級長っていう制度があってね、僕は小学校1年生からずっと級長をやっていたんですよ。体つきでいえば男性の中では僕が一番背が高かった。だから体力はありました。それから勉強も一応できました。ですからまあ……。

高橋: 模範的な？

田原: 模範的な（笑）、子供だったんでしょうね。だけど、級長というのは責任がすごくあるんですよ。誰かが悪いことをすると連帯責任で「お前が止めなかったからいけないんだ」ということになってね、全部僕が責任を取らされたという記憶があるんですね。怒られるとどうされていたかという、講堂に行って、講堂に宮城（きゅうじょう、皇居のこと）と二重橋の写真が貼ってあってね、その写真の額の下に立たされて、「お前そこで立っとなれ」と、そういうのはすごく覚えてる。もうしょっちゅうそれをやらされて。自分が原因で立たされたというのはほとんどないんですね。

高橋: 誰かが何かしてその責任を取らされたの。

田原: そう、まあ自分に原因があって立たされたこともいくつかあってね。1つは小学校1年生の冬に、教室に炭火のストーブがあったんです。僕、そこで炭をおこして暖房をとってたんですね。それで友達に「今から実験やるからどうなる

かみんなで観察しよう」って言ってね、当時の一銭か五銭かをその火の中に入れて、溶けるかどうかというのをやったんですよ。それは怒られたんです。要するにお金は昔、菊の御紋章が入ってて、それを溶かすとはもう不敬でとんでもない。まあ今でもまずいんでしょうけど、あの当時ですからすごく怒られてね。まあ僕は実験で面白いからやってた(笑)。それが1つ、それからもう1つはね、これは小学校の2年か3年ごろの学芸会というのがあってね。僕はわりに学芸会では主人公の役をやるんですけど、太閤記というので豊臣秀吉の役かなんかやって、練習してたんですよ。それで刀を使うでしょ、その中にね、真剣があったんです。それで先生から「これは抜いてはいけません」というふうに言われていたにもかかわらず、友達がね、抜いてたの。

高橋: 危ないですね。

田原: そうそう。それを見つかってね、「なぜそういうことをさせたのか」といって僕が怒られて立たされた。

高橋: それは2人で一緒に立ったわけですね。

田原: 本人は立たされてなかったと思うよ。

高橋: え、そうなんですか、級長だけ?

田原: うん。要するに何もかも級長に責任があった。だから子供なりにねえ、みんなをきちっとさせないと自分に責任がかかってくるというのがあったもんだから、わりによい子供にはなったと思いますね。基本的には悪いことはしないし、誰かが喧嘩をしたりなんかすると止める。先ほど言ったように体格がよかったしね、誰も歯向かってくる人がいないんですよ。みんな恐れていたのかもしれないですね。

高橋: 遊びはどういう遊びをしてたんですか?

田原: 遊びはねえ、地形的にいうと私の家が平地の真ん中あたりにあって、周囲500m以内に山がぐるっとあって囲まれてる。だから山で果物を採ったりとか、兵隊ごっこをやりましたよね。それからすぐそばを川が流れてるんで魚釣りってい

うのはもうしょっちゅうしていました。学校ではみんなで野球というか、球は布を縫ったもので、グローブなどはないからね、素手でやるとか。

高橋: お家にいるよりも外で遊んだほうが好きな感じでしたか?

田原: そう。ただですね、私の家は商売やっていましたけど、親は畑仕事によく出かけていたんですよ。そうするとね、小学生くらいから店番をやっていたんですよ。だからやっぱり定価とかなんとかいうのは結構覚えなきゃいけない。

高橋: 計算したりとか。

田原: そうそう計算したり。例えば醤油・お酢・酒・油、そういう液体とか砂糖も量り売りという世界だったんですね。ですから酒にしる醤油にしる、醤油樽とか酒樽というのがある。そこから瓶に移すんです。買いに来た人が瓶を持ってきてこれに入れてくださいってことで、樽からサイフォンの原理で吸って入れなきゃいけない。吸って入れるというのはかなり抵抗があった。酒に醤油ですよ。だからそういうことをしなくて済むにはどうしたらいいのかというようなことも子供なりに考えて、それでサイフォンの原理ではこっちをしっかりと閉めとけば次はそこを開けるだけというようなことを考える。お客さんが瓶を持ってくる場合もあるけれど、うちでも古い瓶を集めてるものですから、うちで酒を瓶詰にして、それにラベルを貼って封をして売ってたんです。瓶を洗うのが面倒くさいんですよ。だから早く瓶から水を出すにはどうしたらいいのかとかね、どれくらい回転させると早く出るかという、そういうのを考えるのが好きだったんです。

それから夏場は砂糖にアリがたくさんくるんですよ。どうやったらアリが壺に入らないかというのをね、これもいろいろ考えた(笑)。いろいろ実験的にやって、何か釘を入れておくとアリが入らないという話を聞いたことがあったんで釘を入れたけど、砂糖の中に錆びた釘はあんまりよくないなど。それでアリは塩が嫌いだろうから砂糖の

壺の周りに塩を置いていたらバリアになるかと思ってやったけどダメだった。そうすると今度は水を張ればいいと。でも水を張ってもすぐ蒸発してそれもだめ。

高橋：結構いろいろ実験されて。教材がいっぱいありますね。

田原：そうそう、店にあるものが教材。ありとあらゆることを実験してみて。それから店で鏡なんか売ってるとね、鏡1つ1つはどうでもないんだけど、2つの鏡を向かい合わせにして見たくなるじゃないですか。向かい合わせに見るとパーツと鏡に鏡が映る。あれ、と思ったりしてね。だから鏡が反射するというの面白いなと思ってね。先ほど言ったように山がすぐそばですよ。鏡を向けると山に太陽の光が当たるんですよ。それは中学生なのかな、何かで知ったのか、光の速度というのがあると。でも鏡で光を山に映して鏡の角度をちょっと変えると光がスーッと横切るじゃないですか。これ、山がもしずっと遠くだったらね、光が無限の速度で動くんじゃないかと。

高橋：それはなかなか鋭いですね。

田原：あれ、しばらく悩んだことがあるんだよ。何を言ってるかって田舎なもので、外からの文化的知的刺激というのは全然ないんですよ。だから刺激を自分で求める、ということを学んだんじゃないかなあ。だから家に帰って勉強するよりはさ、そっちの方が多くて。そういう意味ではなかなか今の子供に参考になるようなことはないね(笑)。高橋さんが生まれる何十年も前だからね。いや、僕が学校に行ってたころ、明治時代なのはものすごく昔のことだと思ってたんですよ。それから日露戦争(1904年)なんてのもね。でも僕は1936年生まれですから、日露戦争といっても生まれる30年前じゃないですか、今計算したら。だけどね、あの頃ものすごい昔の話だと思ってたわけだよ。ちょうど今ね、明治維新と終戦と今と、ちょうど間隔が同じくらいらしいんだよ。

高橋：僕が生まれたのは1977年なので、終戦の30年後くらいですよ。子供の頃は太平洋戦争のことってだいぶ昔のことに思ってたけど、周りには戦争に行った人がたくさんいたからね。うちの祖父も含めて。そういう意味では田原さんの周りには日露戦争に行ったっていう人もいたはずですよ。

田原：いました。うちの隣のおじいさんですけどね、日露戦争に行ったときの大砲の火薬とかね、持って帰ったきてたの。だけどそれは大昔のような気がしていたんですよ。

高橋：僕が子供の頃は太平洋戦争の話をいろんなところで聞いてましたけど、田原さんが子供の頃は近くのおじいさんから日露戦争の話を聞いてたってことなんですよ。

● 終 戦

高橋：では終戦の頃はいかがでしたか？

田原：さっき言ったように父親が戦争嫌いだった。新聞に戦争関係の地図があって、今どこのあたりで戦争しててどうなったとかっていうのが記事に出てるんですよ。で、覚えてるのは家の壁の一面に地図が貼ってあってね、父親が時々しるしをつけるんです。それで線を引いてね、「アメリカがここまで来たらもう日本は負ける」と言っていましたよ。で、ああそういうもんかなあと思って聞いてて。だから父親は学校では出来が悪かったんだけどその後いろいろな意味で勉強して判断力がついたりとか、そういう知的判断はできていてね。

1つ強烈に印象に残っていることがあるんです。広島に原爆が落ちた日(1945年8月6日)、原爆が落ちたっていうのはその日にはわからなかったんですけど、なにかその日の夕日が普段と違ってものすごく赤かったという印象が残ってるんだよね。夕日というのは日本海側だから広島と反対側で、なぜそういうことになったのか理由はわからないですけど。その日に原爆が落ちたとい

うのは後になってからわかったことです。その時にはなんで今日はこんなに赤い夕陽なのかなあと思った。

高橋：音は全然聞こえなかったですか？

田原：何にも。ただ夕日が赤いなという。原爆というのは、その後も含めてあんまり学校でも教わっていないんじゃないかなあ。

千葉：GHQが報道管制してたんですね。

田原：ああ、そうかもしれないですね。特に学校では。

高橋：終戦の日のことは覚えていますか？

田原：終戦は8月15日、僕は小学校3年の時で、何かちょっとね、何か変な雰囲気を感じていたんだけど、その日僕はお宮の森で蟬取りをして帰ってみたら、店の周りに4,5人くらい大人がいてね。みんなえらく深刻な顔をしてるんですよ。僕はちょっと意味がわからなかったもんでね、口笛を吹きながらそこを通って行ったらね、今でも覚えてるんだけど父が追っかけてきてね、「口笛を吹くとは何事だ」ってものすごく怒られた。それでああ日本は負けたのか、というのがわかりました。

高橋：ラジオは聞きました？

田原：私はラジオは聞いてないです。親が聞いていたらしいんですね。何か神妙な雰囲気だったんですよ。それだけ記憶がある。だけど僕も負けたということがわかってたらね、口笛なんか吹いてその前を通らなかったと思いますけどね。

高橋：終戦後の生活はいかがでしたか？

田原：終戦直後の田舎の役割の1つはやっぱり食料の増産なので、みんなで畑で食料を作って、とにかく大きいものを作るというのが課題でした。とにかく量、栄養と味はどうでもいいから量さえあればいい。芋でもかぼちゃでももう水っぽくてもいいからできるだけ大きなものを作る。そういうことがあるもんですから終戦直後は学校のグラウンドの半分、というか走ったりするところを除いたあたりは耕して芋を植えたりとかね、近くの

山の開墾をして、そこで里芋を植えたり。それから道路があるでしょ、道端には草が生えてますよね、舗装がされていませんから。その道端に沿って耕して豆を植えてた。それは子供の役割だった。まあ全部供出するためですよ。今では全然考えもつかないし、都会の人も全然知らないよね。田舎の生活はそういうことでなるべくたくさん食料を供出するというので、終戦の後しばらくは学校で畑仕事っていえばおかしいけど、そういうようなこともやった。

高橋：進駐軍は来しましたか？

田原：それはね、うっすら覚えてるわけですけど、とにかく何かジープに乗って学校を訪問すると。身分はちょっと知らないけどまあかなり上の人だったらしい。ただ進駐軍って英語でしょうから直接話を聞いたりとかいうことはない。でも周りが緊張してたということだけは覚えてる。それからチョコレートか何かもらった。

高橋：ちょっと前までは藁人形に「鬼畜米英」って言ってたわけじゃないですか。実際に見てどうでした？

田原：そうそう。いやでも、鬼畜米英っていったって何の意味も残ってはいないんですよ。だからアメリカ人がやってきたといっても、鬼畜米英の米兵がやってきたという印象もなかった。だから何かな、そういう思想的な意味のものというのは案外僕にはなかったです。藁人形にした人が来たという印象は全然なかったんですよ。

高橋：やっぱり終戦で学校の雰囲気はだいぶ変わりました？

田原：終戦で学校の雰囲気が変わったという言い方をすれば、先ほどこっちと言ったように級長でものすごく怒られる、罰でどうだこうだというのはなくなったような気がしますね。あとこれは5年生か6年生、終戦直後ではないですよ、教科書のここここは消しなさいよということで、先生に言われて消したという記憶があるんですよ。

高橋：5年生だったら終戦から2年後くらいです

よね。そんな後になってからですか？

田原: 後になって。だからこの部分は消せというのは終戦直後じゃなくて、数年続いていたんじゃないかと。

高橋: どういう部分を消したんですか？

田原: その記憶はないんですよ。あとそういえば6年のときに、先生が「外に出て日食の観測をしなさい」というふうに言ったのを覚えているんですよ。いや、日食というのは調べれば何年の何月の何時ごろから起こったってちゃんと出てくるから、6年生の頃だなんて後でわかるんだけど。日食の観測をして、太陽がどういふに欠けていくかをスケッチするというのをみんなで外に出てやったという印象があるんです。今では禁止されていますけど、ろうそくでガラス板にすずを付けて、それを通して見てたんです。それでね、見ながらスケッチしろと言われたんですね。だからガラス板を見ながら映ってる太陽をなぞればいいなというふうに思ったんですね。そうしたらね、いざ鉛筆でなぞろうとしたら、太陽が鉛筆の陰に隠れてしまって、「あれ？」って。要するに映ってる太陽はこんなに小さいもんかと。感覚的にいうとガラス板を見ながらそのまま描けるんだと思ってたんです。それがなんと太陽というのは小さいものなのかと、それがすごく印象に残ってたんです。

それともう1つは、ガラス板で見た日食というより、ぱっと足元を見たら桜の木の葉っぱの木漏れ日がね、全部三日月の形になってるのね。グラウンドのあたり一辺が三日月をバーッと敷き詰めたようになってる。そっちの方が面白くてね、ええ〜なんでこんなになるのっていうふうに、というのがあって、子供なりに強烈に記憶に残ってるんですね。

高橋: 皆既日食ですか？

田原: ほぼ皆既日食だったかなと思いますね。



小学6年生集合写真（田原氏ご家族提供）。最上段中央腕章の子が田原氏。

●中学時代：校長先生の特別授業

高橋: 中学は義務教育でした？

田原: ええ、僕らの3年くらい前から義務教育。

高橋: じゃあみんな行ったわけですね。中学生の頃は何か思い出はありますか？

田原: 中学校の頃の校長が理科が好きな先生でね、結構僕をかわいがってくれてたんだと思うんだよね。だから学校の授業とは全然関係ないいろいろな実験と一緒にやった。相手をしてくれたという記憶がある。

高橋: 放課後とかですか？

田原: 放課後ですね。学生は僕1人。ただね、これも何をやったかというのはあまり覚えてない。けどひどいことをやられたのを覚えてるんですよ。例えば何かっていったらね、いろいろ試薬があって、強烈なおいがするのもあるわけですよ。でね、その先生は僕の鼻に強アンモニアを突き付けてね、強烈な臭いを嗅がされたことがある。「どうだ、こんなに臭い薬があるんだ」っていったね、先生は喜んでいたんです。それはまだよかったんですけど、もっとひどいはね、昔は工具なんてのはないからね、電線をむしったりするときに口にくわえて歯で引っ張って中の線をむき出すようなことをやってたの。そうしたらね、たぶんわざとだと思ってるんだけど、スイッチを入



中学3年生集合写真（田原氏ご家族提供）。前から2列目中央が田原氏。

れたんだ。僕が口にくわえたまんまでスイッチを入れられてね、これはちょっとね……。

高橋：ビリッと？

田原：ビリッとじゃなくてね、すごかったですよ（笑）。校長はわかってたんです。それで校長は「どうだ」って言ってね。たぶんね、今だったら大事になるね。子供にコードをくわえさせて電気のスイッチを入れるってね。まあそういうようなことをやってたんだ。だから僕もね、校長という感じじゃなくて、友達じゃないんだけど、仲のいい大人のような感じで付き合っていた。

高橋：親戚のおじさんみたいな？

田原：うん、そうそう。昔は校長室というのはなくて、職員室に校長の席があって周りに教員の席があった。そうすると僕は時々遊びに行って、「実験やりましょう」とか言ったりなんかしてるでしょう。気軽に校長と話をするもんだから周りの先生がちょっと怪訝な顔をしてるというのはね、雰囲気としてわかったんですよ。あと、1回たまたま社会科の試験の点数が悪かったときがあったんですよ。そうしたら校長に呼ばれて、

「お前この前の社会の点数が70点、なんでこんなに悪い点を取るんだ」って怒られたことがある。なんでわざわざ職員室まで呼んでそんなことを言ったのかわからないけどね。

高橋：まあ目をかけてもらったと。夜に星を見たりとかはなかったですか？

田原：ああ、それがね、ほとんど天文学という意識はないんですよ。ただ夜ね、夏の暑い日は家に寝るのは面白くないから、そばの畑にムシロを敷いて、そこで蚊に刺されながら空を眺めてたら、なんで月は山から上がるときはあんなにでっかいのに上に行ったら小さいのかなとかさ、そういうのは不思議でしょうがなかったけどね。星がどうだろうというのはなかった。

それからこれはもう小学校からですけど、冬に火の用心の夜回りというのをやってたんですよ。子供が集まって、村の往復2kmくらいの距離ですけどもね、拍子木を打ちながら、「火の用心、火の元ようございますか」と大きな声で言いながら歩いていく。そうすると、夜暗いから空を見ることがあるじゃないですか。たまに流れ星が流れ

てね、あれなんだって。星が流れるの？落ちるの？誰も知らないからね、不思議だなあというのがあったりとかね。

あとね、物を落とせばどんどん速くなるっていうのを知っててね、井戸に落とせば井戸の中をもすごいスピードで落ちてるなどというのは体験的にわかってた。もっと深い井戸に落としたらどうなるんだろうかと、どんどんどんどん速くなるはずなんです。そうすると待てよ、地球を突き抜けるような穴を掘ったら、ものすごい勢いで反対側に飛び出ていくんだろうなあとかね。それはねえ、ちょっと真剣に考えてた。周りの人に聞いても誰も教えてくれない（笑）。

高橋：いろんな日常のことで疑問を持っていたわけですね。理科の先生に質問することはあったんですか？

田原：だからね、もう先生に質問しても答えてくれないものだというふうに思った。先生が何かを教えてくれるという印象はなかったですね。むしろ典型的なのは、中学校の数学の授業で、先生が問題を出して解き方を黒板で説明するじゃないですか。それで説明が終わったらね、「田原君、この説明でよかったですか？」って聞くんだよ。まあだいたいそれでいいんですよ。間違っていない。だから「いいですよ」って言うんだよね。

高橋：それはすごいですね。先生からも信頼というか、この子はすごいっていうふうに思われていたわけですか。

田原：だけど今から考えてみたらね、あの先生ひょっとしたらね、そういうふうにすれば僕が調子に乗ってどんどんどんどん勉強するんじゃないか、褒めて育ててやろうと思っていたんじゃないかと思うんだよね。だからある意味、すごい先生だったんじゃないかという。僕自身もね、なんだこの先生、俺に聞くなんてダメな先生だということは全然思っていなかった。大人になってからね、それこそ僕は教育学の先生なんてものになってから子供を教えるということの意味を知るよう

になって、あああの時の先生はそうだったのかなと思ったということだね。

高橋：田原さんは宇都宮大学の教育学部の教員になって、学部長もやりましたよね。その辺りのお話はまた後ほど伺いますけど、その先生はそんなふうにして田原さんを育てようと思ってたかもしれないと。

田原：それでこれも今だったらありえないと思うんだけどね、中学3年の時に卒業文集というのをみんなで作ろうというので作ったんです。それで文集を作ると巻頭に誰かに挨拶を書いてもらわない。普通だったらね、たぶん校長だと思うんですよ。ド田舎ですからね、1学年1学級で37人くらいですから、せいぜいまあ市長か教育委員長くらいでしょう。僕はそこを飛び越えてね、文部大臣と国立国会図書館長に手紙を出したんですよ。「文集を作ったので、卒業生に対して何かはなむけの言葉をお願いします」と。

高橋：ええっ、それはすごいですね。

田原：そうしたらね、文部大臣からは来なかったですよ。だけど秘書から来たんですよ。天野貞祐というのが文部大臣だった。

高橋：ああ、有名な人ですね。一高（第一高等学校、後の東京大学教養学部）の校長をやった。

田原：大臣は忙しいので手紙は書きませんけれど、普段子供たちに対してこういうことをよくおっしゃっておいりましたので、そのことを代わりに書きますというようなのを書いてくれたんです。それからね、国会図書館長も有名な人だ。金森徳次郎氏、彼からは直接返事が来ました。いや、文部大臣にお願いするというのはわかりますよね。でも国会図書館長というのはなかなか冴えていたなどと思って。要するに文化とか教育とかそういうものに関して偉い人というのは、文部大臣と国立国会図書館長だろうと思って出したんですよ。先生方がびっくりしていたのは覚えてるんです。2人から手紙が来たので、「ええっ、なんでこんな人からお前に手紙が来るんだ」ってね。

高橋: すごいですね。

千葉: 手紙を出すことは先生に言わなかったんですか?

田原: 何も言わない。僕はだいたい自分で勝手にやるようなタイプ。それからそういう何か権威とかそういうのを恐れないというか、あんまり気にしない。というのは、そのずうっと後に学長（宇都宮大学）になってから文部省とかそういうようなところと対応するでしょ。他の学長は文部省にバリアがあると言うけど、僕には全然バリアがない。というのはやっぱり権威というものがそんなに恐れるものではないということが身についてた。逆の言い方をすると、要するに井の中の蛙という、よそのことを知らな過ぎたっていうのがある意味ではよかった。よく知っていると常識というものを身につけさせられて、そんなことは子供がやることではないですよ、とかね。

高橋: 学校の普通の勉強もよくされてたんですか?

田原: それがねえ、勉強をよくしたという記憶はあんまりないんですよ。ただ、記憶に残ってるのは中学校のときに、当時は先生の宿直という制度があったんですよ。あるときに数学の先生が宿直で、その夜に近くの子供たちで数学の勉強をした。中学の2年ごろだと思うけど、そのとき「田原はこれをやれ」といって、中学3年生の数学の勉強をやった記憶はある。

高橋: 先の勉強をしたわけですね。

田原: そうそう、夜、宿直室でね。僕だけじゃない、何人か子が集まって、宿直室で勉強した。

高橋: それは勉強したい子が集まって?

田原: そうそう。そういう文化があったんですね。あとね、僕は体格が大きかったと言ったでしょう。ということはね、スポーツができたんですよ。長距離だけを除けばね、だいたい陸上競技的なものはすべて僕がクラスで一番だったんです。だから短距離、それから球技、バレーボールは得意だったんだけど卓球はあんまり得意じゃない。こちょ

こちょこちょこちょやるのがあんまり得意じゃない（笑）。スポーツはずいぶんやりました。だから中学校の卒業のときみんなで寄せ書きを書きあいつこしてる中では、「田原君、オリンピックに出てください」というのが書いてある。

それから中学校の体育の先生に呼ばれて、その先生に連れられて対外試合に出て行ったことがあるんですね。短距離、100 m, 200 m, それから走り高跳び、幅跳び、砲丸投げ、そういうやつを全部やってたんですよ。だから試合では忙しかったんです。ほかの人は1つやるだけでしょ。僕はせっかく出るんだからってやるものは全部やるって言って、もう砲丸をやりながら合間に走り高跳びに行って、走り幅跳びに行って、ってやってたんですよ。いや、対外試合っていっても、全国的な試合じゃなくて近くの中学校だとか、そういう程度の対外試合ですけど。それに得意だって言ったって、学内ではトップなんだけど、外に出たときは僕よりいいのがいるわけです。高校に入ったときもまあそれなりのことはできるだろうと思ってね、陸上部に入ったんですよ。入ったんだけど2年先輩にすごいのがいてね。すごいというのはその先輩はその後中央大学に行ってオリンピックに出た。それくらいすごい。ええ、こんなに速い人が世の中にいるのってね。いやこれじゃあこのままやったらダメだということで、やめました。

高橋: 中学生の頃は、将来何になりたいとかそういうのはあったんですか?

田原: はっきりしたことは決まっていなかったんですけど、父親の希望は薬剤師なんです。というのはうちのお店で薬を売ってたんですよ。昔は免許がなくても許可制で売ってたんでね。けどあるときから免許制に変わって、薬剤師じゃないと薬を売ってはいけないというふうになったもので、うちで売るためには僕が薬剤師にならなきゃいけない。「お前、進学するんだったら薬剤師になれ」っていうふうに言われた。星製薬会社の星薬

科大学っていう大学があってね、僕はあんまり興味はなかったんだけど。

ただ妙に記憶に残ってて後々に関係しそうなのは、母親と畑仕事に行くときに新聞読みながら行って、「元素の発見」という大きな記事が出ていてね。ああ原子というものが世の中にあるんだというのが妙に記憶に残ってる。

高橋: 新たな元素ってことですね？ たぶん、その頃たくさんの新元素が発見された時代ですね。

田原: 新元素、ウラン以上のね。それからもう1つは中学1年ですけど、湯川（秀樹）さんがノーベル賞をもらった。それもね、ああ日本人がこういうノーベル賞をもらったんだと。もともと僕は理科が得意だったから、そういうような勉強をしたいなあというようなことはなんとなくしにあってたんですね。

高橋: ノーベル賞っていうのは、そういう賞があるのは知ってたんですか？

田原: いや全然知らなかった。

高橋: 湯川さんが取って、そんな賞があるのかと。

田原: そうそう。新聞にデカデカ出たでしょう。それで日本で初だとかそういう見出しがあるじゃない。だから意味はわかりませんよ、だけれどすごいという感じはしたんですよ。日本人ですよ。だから水泳の古橋（廣之進）とか橋爪（四郎）の話をラジオで聞いて手をたたいて喜んでたような話と、文化的に言えば湯川さんのノーベル賞というのが終戦後の日本を元気づけたとよく言われていますよね。それですよ。

高橋: なんかすごいという。

田原: そうそう、ということなんです。理屈はわかりませんよ。原子というのわかりません。ただ中学3年のときに、高校受験する人は補習勉強がありますよというので補習授業を急にやり出したんですよ。それでさっき言った校長がね、「受験には役に立たないんだけどね」って原子の話を

してくれたんです。昔の理科というのは、生活に密着するような科学をやってるわけで、原子とかそういうものは出てこないですからね。原子というものがあって、それがどういう構造をしているのかというのを説明して、すごく印象に残った。

高橋: 校長先生はよく知ってたんですね。

田原: だから化学が得意だったんですけども、化学は結局は原子の結合ですからね。校長が話したことが刺激になったんだろうなというふうに思いますね。

高橋: 本を読んだりはしましたか？

田原: 僕はあんまり本は好きでなかったのかなあ。あんまり小説読んだりとかそういうのはなくてね。ただ妙に記憶があるのはね、中学に行くと学校図書館というのがあったんですよ。そこに原子核の本があってね。菊池とかなんとかという人の本だったような覚えがあるんですよ。それでね、最近になってあれは何の本だったのかというのをちょっと調べたことがあった。菊池正士という人がいるんだけど、彼が岩波から原子核の本を出したのはもっと後からだったんでね、だから菊池さんじゃないかもしれないし、ひょっとしたら菊池さんが子供向けの別の本を書いていたのかもしれない。だけど何か妙に難しかったという記憶はある。

それから本というと、僕の家には僕が小さいときから中学の先生がずーっと下宿していたんですよ。うちの2階は下宿屋みたいなことをやっていたんですよ。その先生の机の上に『三太郎の日記』というのがあった。著者は阿部次郎というんだな。その当時は若者の間でベストセラーだったんですよ。それを見せてもらって読んでね、なんと難しい本だという記憶があってね。だけどほかに本を読んだ記憶というのはあまりないんです。

●高校時代：科学部と自治会

高橋: では高校時代ですが、受験して進学するっていうことですよ。



高校2年生科学部科学班集合写真（田原氏ご家族提供）。後列左から3番目が田原氏。

田原: そうですね、普通科と農林科というのが合わさった益田高校というのが近くにあったんです。普通科で家から行けるといったらそこしかない。もう本当に1個しかなくて選ぶことは全然ない。1年生のときには普通科と農林科というのが一緒に、2年の時に普通科が独立して今の益田高校というふうになったんです。

高橋: 同じ中学で高校に行く人はどれくらいいたんですか？

田原: 普通科に行ったのは、男は私1人で、女が2人行ったかな。それから農林科というのに2人、だから全部で5人で、1学年に37人だから7分の1とかね。

高橋: じゃあまだ高校に行くっていうのは全然一般的ではない。

田原: ええ、珍しいことは珍しいんです。

高橋: 高校では男女比はどのくらいだったんですか？

田原: ええと私のときには4クラス200人で、男女ほぼ半々です。

高橋: 女性もいっぱい進学してたんですね。進学したいと思ったのはどういうきっかけなんですか？

田原: なんとなくしにそのまま就職するという気はなくて、さっき言ったように親父からは薬剤師になれと言われてたもんだから、高校に行くというのは別に不思議でも何でもないということです。

まあ僕はどことなく理科というかサイエンスの勉強をしたいというのがあったんですね。

高橋: やっぱり理科が好きだと。

田原: 高校に行くと都会の中学から来た人がたくさんいるわけで、彼らに言わせれば僕は山里から来たただの山猿なんです。でも1年のときには理科で生物と化学を取ってたんですけど、学年でトップだったんですよ。後で物理もやったけど物理もトップだったし、数学もよかったんです。国語と社会と英語とかいうのは相変わらずで、僕よりできるのがたくさんいたけどね。天文と関係がある地学も選択したんですけど、最初の方に何か覚えなきゃいけないようなことばかり出てくるような気がしてね、「なんだこんなものを覚えなきゃいけないの」ということで、「俺やめます」って言って途中でやめてきました。生物だと覚えられるんだけどね。生物では遺伝の法則というのを習ってね、ああこういう法則性があるのかと、というようなことがあったもので急に生物が好きになったんだろうと思うんです。だから何か理屈っぽいことは好きなんですよ。

先ほどこちょっと話したようにね、最初は陸上競技部に入ったんです。部員はほとんどが農林科の生徒なんです。普通科で陸上部に入ったのは僕くらいしかいないかもしれない。それで、なんかすごい人がいるのでやめて。

高橋: 陸上部はすぐやめたんですか？

田原: ええ、だからその後は科学部というところに入ったんです。まあ理科好きだったから科学部に入って、科学部で何をどうやったかというのはあんまり詳しくは覚えていないんですけど。高校の同窓会をやると、科学部に入っていた女の子が、僕のあだ名が「まことちゃん」だったと言いますよ。

高橋: まことちゃんですか？

田原:僕は全然知らなかったんです。「陰では田原君のことをそうやって呼んでいたんだよ」と。「なんでそんなあだ名をつけたの？」と聞いたら

ね、僕が何か実験をやると「これが真理だ」ってよく言ってたっていうんだよ。僕、全然記憶ないの。それでみんなまことちゃんまことちゃんって陰で言ってたよ。

科学部で僕が一番記憶に残っているのは、ビーカーとかフラスコとかガラス製品が薬品で汚れるでしょ。その汚れを落とすのが妙に好きでね。なぜ好きになったかといったらね、簡単に落ちないんですよ。科学部の先生はね、「洗ったってダメだよ」と。ダメだよと言われると落としてやろうとね（笑）、先生が絶対落ちないというようなのを落とすのが好きだったんですよ。塩酸とか硝酸とか使えるじゃないですか、理科室ですから。それでこれを落とすのにはどういう薬品を使うといいかと。

高橋：それはまさに理科の実験ですよ。

田原：そうそう。だから硫酸とか塩酸とかいろいろ薬があるでしょ。そういうのを理屈じゃなくてね、なんとなしにこれとこれを混ぜると何かなりそうだという感じがする、試行錯誤ですよ。そうすると落ちるときがあるんですよ。「ああ、やった」という感じで面白い。それで先生が、「あ、落ちたの？」って褒めてくれた記憶があるしね。あとは文化祭かなにかで展示物をいろいろやってたりして、例えば火山の模型で、これも火が出てバーッと煙が出てくるような、塩酸か何か混ぜると出てくるんです。そういうのをやって、見学していく子供と大人たちを喜ばせるとかね。物理でいえば、リサージュ図形という振り子の実験をやって、なんでこういう振り子を作るとこういう綺麗な模様ができるのかというのをみんなに見せたりね。高校もね、学校で何を勉強したというよりは、こっちの方しか記憶に残ってないですね。

高橋：やっぱり高校でも自分で考えていろいろ試していったと。

田原：そうそう。でも試験的な意味でも得意だったです。それから僕は2年生ごろから自治会というのに入ったんですよ。



1954年、高校の修学旅行、品川駅にて（田原氏ご家族提供）。

千葉：高校の自治会ですか？

田原：高校の自治会。自治会というのは会長とか体育部長とか文化部長とかという長があって、その長の下にいろんなサークルがあるような学生の組織なんですね。それで自治会室というのがあって、僕はしょっちゅうそこに行って友達と議論したり遊んだりしてた。まあたまたまそこに集まってくる連中はわりに学校の成績のいいものばかりだったから、それなりに面白かった。僕は自治会長はやらなかったんですけど、体育部長というのになった。誰が何をやるかと話してたとき、「お前が一番体育ができる」と。

高橋：普通科の中ではということですか。2年生から農林科と学校が別れたということでした。

田原：そうそう。普通科でスポーツが得意っていうのはあんまりいないんですよ。だから普通科の体育大会だと僕はかなり一番がとれる。それでお前がとにかく体育部長をやれっていうふうなので、そっちの責任者になったんですよ。

自治会ではお金の配分とかいろいろなことをみんなで相談しながらやっていました。ちょっと記憶に残ってるのは、僕は体育部長なんだけれど、いろいろなサークルで何をどうするかというのをいろいろ検討してた。体育部の顧問の先生が

ら見たら、体育部長は体育部の方に金を獲ってくるというのが役割だと思ってたんでしょうね。でも僕はいろいろ考えて、文化部がこれだけあるんだったら体育部の予算を少し減らしても文化部に回した方がいいだろうって、体育部の予算を減らしたんです。そうしたら顧問の先生に呼び出されてすごく怒られた。「お前は体育部長なのに、なんで体育部の予算を減らすのか」と。だから今考えるとその当時からね、ああ僕は別に自分だけのことを考えてはいなかったんだなあ。

高橋：全体をよく見て。

田原：そうそう。でも僕にとってはそれが当たり前で。だからずうっと後の話になるけど、宇都宮大学の学長になるときに教育学部からの推薦なんだけど、「僕が学長になったら教育学部に不利なことをやるかもしれないよ」と言った記憶がある。どうもね、自分のところから学長を出すと自分のところが得になるんじゃないかというような文化がずうっとあったんですよ。僕はそういうのは全然気にしない。だから高校のときにあんなことを言ったのもそういうことだったんだなあと思ってね。

高橋：学生のころから全体を見て人をまとめるような役をされて。たぶん後の天文台の共同利用の話にもつながってきますね。

田原：うん、だから小さいときから全体を見ながらある意味リーダーというかな、責任を持ってやらなきゃいけないもんだというのが身についてたんじゃないかな。田舎の大将というかね。別に先生から言われた記憶はないんですけど。小学生のころには級長でよく怒られてたから、みんなが幸せなら俺も怒られなくて済むという（笑）。

千葉：いやあ、でもよく思い出しますよね。資料か何かを見てきたんですか？

田原：特別な資料はないんですけど、親せきが

集まったときにあのときこうだったなあとか、同窓会があったときには子供のときこうだったなあという、断片的にはいろいろ話すときがあるから、その時々思い出してるでしょ。だけれど今回はちょっとまとめてお話しするということだから、その断片的なものを整理していくとね、子供の頃の体験とか教育があって、ああ自分の生涯というのは結構小学校中学校の頃からかなり個性的で、その後のいろんなことがもう決まっていたのかなあというふうに思いますね。

（第2回に続く）

A Long Interview with Prof. Hiroto Tabara [1]

Keitaro TAKAHASHI

Faculty of Advanced Science and Technology,
Kumamoto University, 2-39-1 Kurokami,
Kumamoto 860-8555, Japan

Abstract: This is the first article of the series of a long interview with Prof. Hiroto Tabara. He studied physics at Rikkyo University and is known as a pioneer of cosmic magnetism research: he compiled a catalogue of the linear polarization of radio sources and used the Faraday rotation derived from it to probe the galactic magnetic field. He was also involved in building the operational and common-use systems of the Nobeyama Radio Observatory and served as President of the Astronomical Society of Japan from 2001 to 2002, making major contributions to the astronomical community. At Utsunomiya University he served as Dean of the Faculty of Education and later as President, contributing substantially to discussions on education and on university system. In this first article, which covers his boyhood through his high school years, he talks about the experiments he devised using goods from his family's shop, his memories of village life during and after the World War II, the unexpected letters that arrived for his graduation anthology, and the student council in high school. The first signs of the leadership with which he would later help build the astronomical community and its common-use framework can already be seen here.